

B—37 皮革の染色性とそのクリーニングの研究
(第1報) 皮革の捺染

東京家政大短大 ○ト部 澄子
堀尾 博子
松井 正子
本田 悦子

1. 被服材料として使用される布の染色の加工は、無地染（浸染）と各種模様染（捺染）に大別される。皮革は手工芸染法で多くの模様づけが行なわれているが、皮の衣料の模様染は見当らない。本研究は皮の染色性を考察して、皮に一般被服材料と同様な捺染々法が可能か否かの研究を行なった。第1報は主として、皮革の捺染の最も基礎的な試験研究結果の報告を行なう。

2. 研究材料にはcalfのクロム鞣し皮を使用し、皮革に適する染料のうち、まず酸性染料（外国及国産染料）を選んだ。捺染糊料として、代表的な4種（C. M. C., アルギン酸ソーダ, トラガントゴム, 友禅糊）を用い、これらの色糊の特徴をとらえ、色糊の濃度、添加助剤の検討、熱処理の温湿度などを考慮して、染着された皮の染料の滲透状態、堅ろう度、その他を比較検討した。

3. 皮革の染色は、次の諸点に問題がある。
即ち ①なめし方により染色法が異り、なめし色が残って、淡色、鮮明色が難かしい。②皮の部位により染料の親和力が異なる。③布と違い厚みがあり不定形である。④皮は高温で損傷される。など、今後この性質と捺染との関係は多くの問題があるが、本研究では各糊料はそれぞれ特徴があり捺染は可能であった。最も適当な糊料は、アルギン酸ソーダ、トラガントゴム糊で、助剤にチオ尿素及尿素を添加すれば、各糊料中の染料は、殆ど皮の内部まで移染する。